

週刊

# うたごえ新聞

1/3・10

(合併号)  
(2005年)

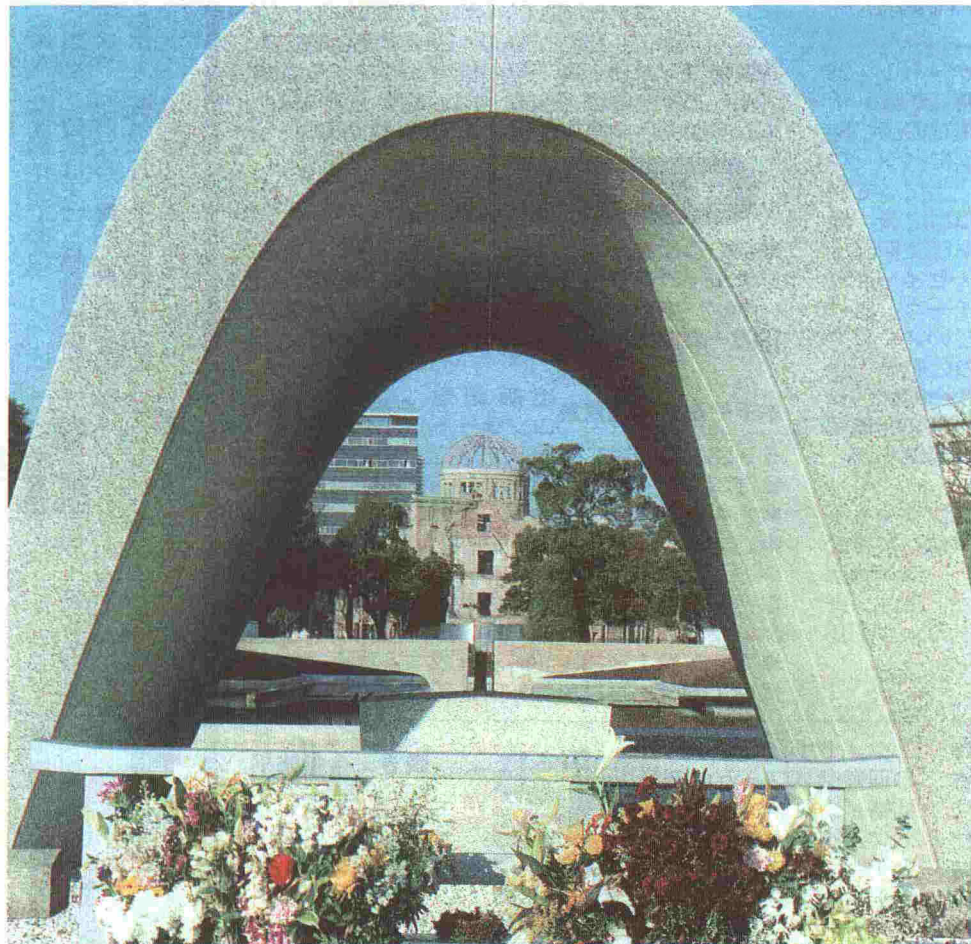
NO. 1960

THE SINGING VOICE OF JAPAN (UTAGOE)  
日本のうたごえ全国協議会機関紙  
うたごえ新聞社  
〒169-0072 東京都新宿区大久保2-16-36  
☎03(3209)0638 FAX03(3200)0105  
E-Mail: journal@utagoe.gr.jp  
http://www.utagoe.gr.jp/journal/  
振替口座 00120-6-5631 毎週月曜日発行

## 2005年 賀正

被爆・戦後60年

3人の高校生（写真右から平元美智子、三宅克典、倉橋友美さん）は当時の大州中学生と担任の横山基晴先生。中学3年間の平和学習をもとに学年全員160人が寄せた一言メッセージから、広島合唱団の高田さんらによって歌「ねがい」は生まれた。卒業直前の完成で彼らは学年発表会で歌って卒業していった。



山先生は笑う。高校でも、彼らは平和ゼミナルなどで平和活動を続けてきた。「大学に行ってもこの活動は続ける。平和学習で世界を知ったようにいろいろな国の人と交流したい。」

彼らの元から飛びたった「ねがい」は世界に広がっていった。「今歌を聞くとなんかすごいプロが作った感じ。こんなに広がるのが

不思議だが、平和学習でみんな意見交換したのが形になったと思う」「自分たちの思いにみんなが乗ってきてくれるのが、すごくうれしい。平和への思いはみんな同じなんだと思う」と言う。

なになにせ、戦争が止められないのだから、なぜ、戦争放棄の憲法第九条を愛せようという動きが出るの

3年生から生まれた歌「ねがい」（山ノ木竹志補作詞、たかたりゅうじ曲）がインターネットを通じて30万回語に広がり、世界にその協同を呼びかけている。「ねがい」を生み出した若者たちに、60年前、人類初の核兵器の惨禍を受けた広島、爆心地平和公園で会った。三輪純永記者

# 平和への「ねがい」にみんな乗って！

過去の出来事、遠く離れた地で起こっていることを、知り、記憶し、現在と未来を創る糧にできるのは想像力と行動だ。3年前、広島の大州中学

3年生から生まれた歌「ねがい」（山ノ木竹志補作詞、たかたりゅうじ曲）がインターネットを通じて30万回語に広がり、世界にその協同を呼びかけている。「ねがい」を生み出した若者たちに、60年前、人類初の核兵器の惨禍を受けた広島、爆心地平和公園で会った。

「ねがい」は世界に広がっていった。「今歌を聞くとなんかすごいプロが作った感じ。こんなに広がるのが不思議だが、平和学習でみんな意見交換したのが形になったと思う」「自分たちの思いにみんなが乗ってきてくれるのが、すごくうれしい。平和への思いはみんな同じなんだと思う」と言う。

卒業後も横山先生がよびかける「ねがい交流会」を通して、昨年7月も広島ピースウェーブコンサートでケニア、台湾の高校生と「ねがい」を歌った。「平和への思いを持つ者がここにいて、一緒に集って伝えていけると歌いながら実感した。11月の『日本のうたごえ祭典』ひろしま」で、これから大学で出会う人たちも誘って「ねがい」を歌いたいと言う。

秋葉忠利広島市長は、昨年の「平和宣言」で、「記憶と行動の年へと語った。まだ廃絶されない核兵器、繰り返される核実験、世界第二位の「軍事力」を持つ日本の自衛隊...」記憶はまだ弱く、平和憲法が行使されていない現実でもある。

## 私たちは自由への歩みをやめない ヒロシマから高校生たちのメッセージ

「ねがい」を歌った。「平和への思いを持つ者がここにいて、一緒に集って伝えていけると歌いながら実感した。11月の『日本のうたごえ祭典』ひろしま」で、これから大学で出会う人たちも誘って「ねがい」を歌いたいと言う。そして、彼らの一言も勇気が湧く。「憲法」改正って国民投票でしょ、変えてはダメって言う人をいっぱい増やせばいいんだよね。」

2005年1月3・10日新年号

本紙創刊50周年に寄せて 池辺 晋一郎

西 恒人 3面 / あの日から10年 (読者拡大本部長) / 1・17震災鎮魂と復興の詩 4面

若者群像 “はばたくルーキーたち” 5面

新春座談会 ヒロシマ・ナガサキから世界へ平和の歌 6・7面

2005年 各地のうたごえ新報 / 夢をもとむ 9面

郷土のうたと踊り “それ打て響け” ① 10面  
新シリーズ 川崎・田楽座公演から

〈連載〉ミュージック・トゥーデイ (和田静香) / われらニヤガの合唱ニヤン / 試験室 / 映画 空を見てください (池辺晋一郎)

東京の夏音楽祭 / サイモン・ラトル 11面  
「音楽は心を豊かにするために」

ピーク・ホーンさん(ベトナム)インタビュー 12面

※次号1月17日号本局発送は1月7日です

「被爆60年は被爆者が語れる最後の節目。次の70年にはほとんどいなくなっている」と被爆者相談所の方に言われ、あらためて受け止めたこと新春座談会(6・7面)で語る熊谷勇二(2005年日本のうたごえ祭典)ひろしま運営委員長。その重みに向き合う年頭。

「だががなんと言おうと、武力による紛争解決、集団的自衛権を放棄(武力で敵軍を倒すための徒労を組まない)した日本国憲法第九条は人類が到達した最高の英知だ。イラクも取材した鳥越太一郎氏、世界60カ国を取材の伊藤千尋氏らジャーナリストは語る。

